

日本計量生物学会 ニュースレター

1. 巻頭言	- 1	7. 2023 年度年会・チュートリアルのお知らせ	- 6
2. 試験統計家認定制度について	- 2	8. 2023 年度統計関連学会連合大会のお知らせ	- 6
3. 次期評議員（社員）予定者による懇談会 議事録	- 2	9. シリーズ「計量生物学の未来に向けて」	- 6
4. 2022 年度理事会議事録	- 3	10. 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い	- 8
5. 2022 年度統計関連学会連合大会報告	- 4	11. 2023 年度学会賞および功労賞候補者推薦の お願い	- 9
6. 2022 年度計量生物セミナー・計量生物学 講演会のお知らせ	- 5	12. 編集後記	- 9

1. 巻頭言「功労賞を受賞して」

山岡 和枝（帝京大学大学院公衆衛生学研究科・鉄祐クリニカルリサーチセンター）

このたび、2022 年度の功労賞を丹後俊郎先生との同時受賞として賜り、大変光栄なことと思うのと同時に、恐縮の至りです。迷いながらも、学会の中で女性として初めての受賞ということもあり、受けさせていただきましました。ありがとうございました。そこで、ここでは女性の活躍ということについて、雑感ですが、少しお話しさせていただこうと思います。

私はこれまで、男女同権とか、女性だから... という言い方や理由は逆差別なような気がして好きではありませんでした。でも、言われてみて、そういえば日本の計量生物学会では、国際計量生物学会には女性会員や女性役員が大勢いるのに比べて女性役員が少ないということ、改めて認識させられました。以前、（どこかにも書いたように思いますが）私が初めて国際計量生物学会に参加したとき、女性の参加者が多いこと、さらに、とても堂々と発表する女性研究者に衝撃ともいえる印象を受けました。皆、自由に（もちろん男女を問わず、ですが）思い思いのいで立ちで堂々と発表している姿は今でも目に浮かびます。また、その後の国際会議の打ち合わせの場などでも、むしろ、男性より女性の学会関係者のほうが「パワフル！」と感ずることが少なくありませんでした。

もう一つ、女性ということに関連して印象深いことがあります。国際臨床生物統計学会議（ISCB）で、確か、モンリオールでの会議だったと思いますが、特別講演で Nan Laird 先生が講演されたときのことで。それまで Longitudinal data analysis や Meta-analysis の Laird

法でのお名前しか知らなかった先生ですが、その講演では大きな講堂がいっぱいになるほどの参加者が、みな、先生の講演に聞き惚れていたということがありました。私にとっては女性研究者として憧れ尊敬する先生ですが、とても気さくで優雅な方で、講演後の懇親会で片言のご挨拶ににっこりと微笑み返してくださったことがとてもうれしかったのを覚えています。Nan 先生にはその後、2 年ほどかけてアタックし、帝京大学で行っていた帝京—ハーバード特別講義の生物統計学の講義を 2 年にわたり担当していただきました。なお、この講義は当初、Longitudinal data analysis の講義をとお願いしていたのですが、それにはもう興味はなく、当時興味を持たれ研究も進められていた遺伝統計学でよければ... というので、お引き受けいただきました。初歩的なことに限定したものの、学生にとってかなり難しかったと思います。また、このときには船渡川伊久子先生に大変お世話になりました。Nan 先生はこれまでいくつもの賞を受賞されていますが、昨年（2021 年）、統計学の世界で偉業を成し遂げた研究者に贈られる International Prize in Statistics を、生存分析の David Cox、ブートストラップ法の Bradley Efron に次いで 3 人目の受賞者となりました。このような女性研究者がさらに続いてくれることを願っています。

さて、日本の話に戻りますが、遠い昔の私の学生時代、数学科には女性が少なく、1 割程度という時期が続いていました。しかし現在は生物統計学を学んでいる学生さんのなかでの女性の割

合はずっと多くなっているように思います。生物統計学会の会員も徐々に増えてきており、優れた研究者もおられます。ではなぜ、女性の役

員が少ないのか、その辺の問題も考えて、より自然なかたちで男女共同という本来の意味での活動が活発になることを願っています。

2. 試験統計家認定制度について

手良向 聡, 安藤 友紀, 大門 貴志, 長谷川 貴大 (試験統計家認定担当理事)

2017年4月に開始しました「試験統計家認定制度」では、臨床研究の統計的デザインと解析・統計家の行動基準に関し深い知識を有し、実践している者を試験統計家 (trial statistician) として認定します。臨床研究の科学的かつ倫理的な質を高めることで人々が有効かつ安全な医療の恩恵を受けること、併せて計量生物学の進歩と発展を目指しています。規則・細則, Q&A, 審査基準等の詳細については、学会 HP をご覧ください。

試験統計家は、臨床研究のデザインと解析の科学的・倫理的側面の責任を負う「責任試験統計家」、臨床研究のデザインと解析に関連する実務を行う「実務試験統計家」の2種類の区分からなり、2022年4月時点で責任試験統計家28名、実務試験統計家59名が認定されています。

認定された試験統計家から、次のような一言が寄せられています。『幸運にも数多くの臨床試験に参画する機会に恵まれ認定資格を得ることが出来ました。信頼を裏切らないよう責任を持って業務に取り組むと同時に、自身の所属する施設のメンバーにも認定資格取得の機会を与えることが出来ればと思います。』(責任試験統計家: 国立がん研究センター・水澤純基), 『認定を受けると認知度が上がり、今まで以上に様々な治験関連業務に関わる必要が生じるという面もありそうです。しかし、関与してみるとその意義はあったと感じるものも多くあります。例えば、品質マネジメントシステムの構築では、リスクをどう評価し、モニタリングするかの検討に統計学的な目線が入るのは有益です。治験使用薬をどのように定義

するかという議論もあります。これは Estimand の一部分ですので、定義に迷う事例では試験統計家の介入が必要です。試験統計家の役割は広く、責任は大きいと感じます。』(実務試験統計家: 株式会社ヤクルト本社・谷口隆司)

今後の予定は以下の通りです。なお、2023年度の認定申請のためには2020年4月~2023年3月の間に開催された認定講習会への参加が必須です。

- ・2022年12月17日: 2022年度認定講習会 (2回目, 定員15名程度, オンライン開催)
- ・2023年3月: 2022年度申請分 責任・実務試験統計家認定および責任試験統計家更新認定
- ・2023年5月~7月: 2023年度 責任・実務試験統計家認定申請受付
- ・2023年10月: 2023年度 責任・実務試験統計家更新申請受付

すでに試験統計家認定を受けられた方については、更新のために有効期間内 (5年間) に30単位が必要です。単位が付与される学会・セミナー (日本計量生物学会年会, 計量生物セミナー, 計量生物学講演会, 統計関連学会連合大会, IBC) に参加された場合は、参加証等の証明書が必要となりますので、各学会等で取得後、認定の更新時まで保管をお願いいたします。なお、年会・セミナー・講演会については、試験統計家認定委員会が発行する受講証の保管をお願いいたします。

3. 次期評議員 (社員) 予定者による懇談会議事録

寒水 孝司, 高橋 邦彦 (庶務担当理事)

日時: 2022年11月14日 (月) 18:00~19:20
場所: 東京理科大学工学部情報工学科寒水研究室
個室を本部とする Zoom 新社員 (評議員)
懇談会
出席: (東日本)
安藤 (宗), 安藤 (友), 伊藤, 上村, 大庭,
口羽, 五所, 坂巻, 佐藤, 篠崎, 柴田,
寒水, 高橋, 田栗, 土屋, 長島, 平川,
船渡川, 松山, 山本 (紘), 山本 (英),

横田
(西日本)
伊藤, 大森, 嘉田, 川口, 新谷, 大門,
田中, 土居, 長谷川, 服部, 古川, 松井
欠席: (東日本)
丹後, 野間, 山口
(西日本)
折笠, 手良向, 室谷
出席社員数: 総社員数 40名

出席社員数 40 名 (委任状出席含む)
議長：代表理事 松井茂之

審議事項

第 1 号議案 会長の候補者の選出

会長 (兼：理事) の候補者を互選により選出することが確認された。松井会長から、自薦・他薦の順番で候補者を募り、その上で、候補者が複数の場合は、協議・選挙等によって会長の候補者を選出することが提案された。その結果、自薦される方がいなかったため、松井会長から、松山裕氏と服部聡氏が推薦され、会長の候補者を選挙によって選出することになった。出席者 34 名と欠席者 6 名 (受任者が代理投票) の投票によって、会長候補者として、服部聡氏が選出され、出席社員の全員一致で賛同が得られた。

第 2 号議案 理事の候補者の選出

理事選挙は事前投票 (投票期間 10 月 24 日 (月) ~ 10 月 30 日 (日)) として実施されたことが報告された。細則第 3 条 (3) より、現 council member の大門貴志氏、高橋邦彦氏、船渡川伊久子氏、名誉会員の丹後俊郎の合計 4 名を除いた評議員 36 人が被選挙人であり、7 名連記の投票のもと、11 月 7 日 (月) に開票の結果、投票者数は 40 名/40 名

であったことが報告された。会長候補者を含めた 8 名の理事の選出において、次の 8 名の理事を選出した。現 council member の 3 名を加えた合計 11 名の理事の選出に対して、出席評議員の全員一致で賛同が得られた。

- ・ 選挙による選出：8 名 (五十音順、敬称略)
大庭幸治、大森崇、寒水孝司、田栗正隆、手良向聡、服部聡、松井茂之、松山裕
- ・ 現 council member：3 名 (五十音順、敬称略)
大門貴志、高橋邦彦、船渡川伊久子

第 3 号議案 会長以外の代表理事の候補者の選出

会長以外の代表理事として、自薦・他薦がなかったこととこれまでの慣例を踏まえて、松井会長が代表理事を継続することについて、出席評議員の全員一致で賛同が得られた。

報告事項

(1) 社員 (評議員) 選挙結果報告 (選挙管理委員会) 選挙管理委員会委員長より社員 (評議員) 選挙の結果が報告された。

(2) 今後の予定

2023 年度の定時社員総会までの予定が報告された。

4. 2022 年度理事会議事録

寒水 孝司、高橋 邦彦 (庶務担当理事)

○ 2022 年度 第 4 回対面 (Web) 理事会

日時：2022 年 8 月 31 日 (水) 17:00~18:40
場所：東京理科大学工学部情報工学科寒水研究室個室を本部とする Zoom 会議
出席：松井、安藤、大庭、大森、川口、五所、柴田、寒水、大門、高橋、田栗、手良向、長谷川、服部、船渡川、松山、松浦 (監事)、山本 (監事)

欠席：なし

定款第 35 条に従い、定足数を満たしていることを確認した後、定款第 34 条に従い、松井会長を議長として議案を審議した。

審議事項

第 1 号議案 入会申し込み

5 月 10 日 (火) から 8 月 10 日 (水) の期間に申し込みのあった 13 名の入会申し込みについて、全員異議なくこれを承認した。

第 2 号議案 次期評議員 (社員) 予定者による懇談会の日時

次期評議員 (社員) 予定者による懇談会を 11 月 14 日 (月) 18:00 から開催することについて、全員異議なくこれを承認した。

第 3 号議案 日本疫学会プレセミナー案 (疫学会との共催)

日本疫学会プレセミナー案 (疫学会との共催) について、全員異議なくこれを承認した。

第 4 号議案 計量生物セミナー案

計量生物セミナー案について、全員異議なくこれを承認した。

第 5 号議案 交通費・宿泊費の支給規定、講師等講演謝金基準額の改定案

交通費・宿泊費の支給規定、講師等講演謝金基準額の改定案について、引き続き検討することが確認された。2022 年度計量生物セミナーの謝金については、2021 年度の基準に合わせる事が承認された。

第 6 号議案 HP 改修に伴う追加費用

HP 改修に伴う追加費用について、全員異議なくこれを承認した。

第7号議案 認定に係る試験事務局（ソウブン・ドットコム）経費

認定に係る試験事務局（ソウブン・ドットコム）経費について、全員異議なくこれを承認した。

報告事項

(1) 庶務関連

退会者、会員種別の変更、会員数（8月10日時点）、宛先不明者、統計関連学会連合大会の録画コンテンツの利用の方針、Zoomの契約の更新が報告された。

(2) 会報関連

140号の発行予定（2022年11月下旬）が報告された。

(3) 編集関連

現在の投稿状況、40周年記念事業の準備状況が報告された。

5. 2022年度統計関連学会連合大会報告

田栗 正隆, 安藤 友紀, 川口 淳, 五所 正彦, 長谷川 貴大（企画担当理事）

2022年度統計関連学会連合大会は、2022年9月4日（日）から8日（木）にかけて成蹊大学およびオンラインのハイブリッド形式で開催されました。本大会登録者数は899名で、招待者57名とチュートリアルも含めた大会全体の参加者数は合計968名と前年度（本大会登録者数811名）を上回る盛会になりました。日本計量生物学会からは日本計量生物学会シンポジウム、日本計量生物学会奨励賞受賞者講演の2つの企画セッションが行われました。

9月7日（水）の午後に行われた日本計量生物学会40周年記念シンポジウム「計量生物学の発展と今後の展開」では、日本計量生物学会が発足して40周年を迎えたことを記念して、学会誌特集号と連動した記念シンポジウムを行いました。臨床試験、疫学、水産学、農学からそれぞれ中心的な活躍をされている方々に、その領域の過去から今後の発展に関わる話題を分かりやすく紹介していただくと同時に、最先端の話題が共有されました。これをきっかけに、分野内外の交流がより効果的に進む契機となりました。

9月8日（水）の午後に、日本計量生物学会シンポジウムに続いて2022年日本計量生物学会

(4) 会計関連

国際会員の手続きの状況、Web ページでの課税・不課税情報の掲載の準備状況、事務局との打ち合わせの結果が報告された。

(5) 企画関連

2022年度統計関連学会連合大会の準備状況と企画委員会の打ち合わせの結果が報告された。

(6) 広報関連

HPの更新の作業状況が報告された。

(7) 試験統計家認定関連

試験統計家認定（2022年度新規・更新認定のスケジュール）と認定講習会（2022年度）の予定が報告された。

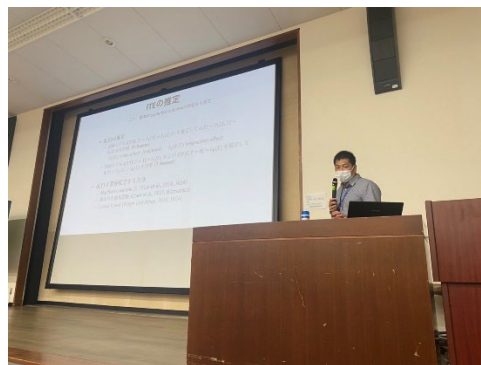
(8) 選挙関連

2023-2024年度社員（評議員）選挙の予定が報告された。

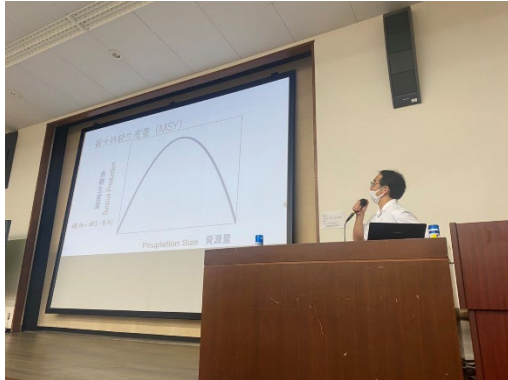
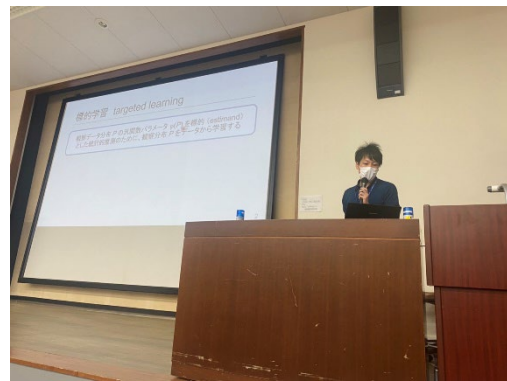
(9) その他

2023-2024年度社員（評議員）選挙後の理事会と社員総会の予定が報告された。

奨励賞受賞者講演が行われました。今回の奨励賞受賞者は菅澤翔之助氏（東京大学）であり、菅原氏からの講演がありました。菅澤氏の「Efficient screening of predictive biomarkers for individual treatment selection」では、治療効果の予測因子となる複数のバイオマーカー存在下でベイズ流アプローチを使用して効率的に候補となるバイオマーカーを選択する新しい方法論が紹介されました。受賞者である菅澤氏の今後のさらなるご活躍を祈念いたします。



日本計量生物学会奨励賞受賞者講演の様子



40 周年記念シンポジウム講演の様子(左上から時計回りに松井茂之会長(名古屋大学・統計数理研究所), 篠崎智大氏(東京理科大学), 三中信宏氏(農業・食品産業技術総合研究機構), 岡村寛氏(水産研究・教育機構))

6. 2022 年度計量生物セミナー・計量生物学講演会のお知らせ

田栗 正隆, 安藤 友紀, 川口 淳, 五所 正彦, 長谷川 貴大 (企画担当理事)

2022 年度計量生物セミナーを 2022 年 12 月 8 日 (木), 9 日 (金) 午前にはハイブリッド開催いたします。現地会場は, 中央大学 後楽園キャンパス (<https://www.chuo-u.ac.jp/access/kourakuen/>) となります。今回のテーマは「生存時間解析」です。以下に概要を記載します。

テーマ：生存時間解析

日時：2022 年 12 月 8 日 9:50~18:00, 9 日 9:00~12:10

開催形式：ハイブリッド開催 (現地・Zoom Webinar)

現地会場：中央大学 後楽園キャンパス 5 号館 (<https://www.chuo-u.ac.jp/access/kourakuen/>)

参加登録方法：オンラインポータルサイト (<https://jbs-seminar.ywstat.jp/>) から申し込み

参加費：日本計量生物学会員 (一般) 5,000 円

日本計量生物学会員 (学生) 1,000 円

日本計量生物学非会員 (一般) 10,000 円

日本計量生物学非会員 (学生) 4,000 円

定員 (参加登録時の先着順)：120 名 (現地), 500 名 (Zoom Webinar)

オーガナイザー：江村 剛志 (久留米大学), 長谷川 貴大 (塩野義製薬), 田栗 正隆 (東京医科大学)

詳細：学会 HP (<https://www.biometrics.gr.jp/>)

また, 2022 年 12 月 9 日 (金) 14 時から同会場にて, 計量生物学講演会を開催いたします。宇野一先生 (Dana-Farber Cancer Institute / Harvard Medical School) を招待し, 「生存時間に対する治療効果の定量化問題におけるモデルに依存しない方法の開発と普及」をテーマに講演いただきます。以下に概要を記載します。

日時：2022 年 12 月 9 日 14:00~15:30

開催形式：現地開催のみ

現地会場：中央大学 後楽園キャンパス 5 号館 (<https://www.chuo-u.ac.jp/access/kourakuen/>)

参加登録方法：オンラインポータルサイト (<https://jbs-seminar.ywstat.jp/>) から申し込み

参加費：無料

定員 (参加登録時の先着順)：200 名 (現地のみ)

司会：長谷川 貴大 (塩野義製薬), 田栗 正隆 (東

京医科大学)
詳細：学会 HP (<https://www.biometrics.gr.jp/>)

会員の皆様の奮ってのご参加をお待ちしています。

7. 2023 年度年会・チュートリアルのお知らせ

田栗 正隆, 安藤 友紀, 川口 淳, 五所 正彦, 長谷川 貴大 (企画担当理事)

2023 年度日本計量生物学会年会およびチュートリアルを、2023 年 4 月 20 日 (木) 及び 21 日 (金) に北海道大学 学術交流会館 講堂 (<https://www.hokudai.ac.jp/bureau/property/>) で開催予定です (応用統計学会と共催)。2023 年度も一般公演として口頭発表及びポスター発表を募集する予定ですので、是非とも講演申し込みをご

検討下さいますようよろしくお願いいたします。今年度も 40 歳未満の若手の正会員・学生会員を対象に「若手優秀発表賞」の表彰を行う予定です。セッションやチュートリアルの内容、講演及び参加申し込み等の詳細については、後日、学会 HP (<https://www.biometrics.gr.jp/>) 及びメーリングリストでご案内します。

8. 2023 年度統計関連学会連合大会のお知らせ

篠崎 智大, 土居 正明 (統計関連学会連合大会プログラム委員)

2023 年度統計関連学会連合大会は 2023 年 9 月 3 日 (日) ~9 月 7 日 (木) に開催されます。京都大学吉田キャンパス (京都府京都市) およびオンラインのハイブリッドでの開催を検討しております。

チュートリアルセッションおよび市民講演会、企画セッション、一般演題に加えてコンペティションなどを予定しています。詳細は未定ですが、奮ってご参加をお願いいたします。

9. シリーズ「計量生物学の未来に向けて」

9.1 方法論の探究と実務のバランスを目指して

野村 尚吾 (東京大学)

故・浜田知久馬先生のゼミに参加し、計量生物学の世界に飛び込んだのが 2007 年、早いもので約 15 年が経過しようとしています。大学院を修了した後は国立がん研究センターに就職し、2020 年 4 月からは本学大学院 医学系研究科 生物統計情報学講座にて、生物統計家の育成に従事しております。

これまで、私は主にかん領域の臨床試験に関わってきました。国立がん研究センターに就職した 2012 年頃は、殺細胞薬の併用療法 (順列組合せ) から分子標的治療薬・免疫チェックポイント阻害剤を絡めた治療へと開発の中心が変わりつつあった、まさにがん薬物治療の大転換期でした。がん領域の検証的試験と言えば、「生存時間型のエンドポイントに対してログランク検定・Cox 回帰」といったお作法的なデザイン・解析が確立していますが、治療開発競争の激化に伴い治療の特性や医療上のニーズが多様化しています。この種のお作法的なデザイン・解析では望ましい統計的性質が得られない、結果の解釈が容易でない、といった状況に遭遇する機会が

増えています。こういった背景から、比例ハザード性が成立しない場合の治療効果の定量化、複数の対象集団 (例えば PD-L1 強陽性例と全集団) や複数のエンドポイント (例えば PFS と OS) 等を考慮した多重比較法など、新しい統計的アプローチの必要性が増えています。治療の個別化・開発のグローバル化が急速に進む昨今では、限られたリソースを有効活用するため、既存の規制の枠組みでは受け入れ難いとされてきた方法論 (例えば、ベイズ流アダプティブデザインやリアルワールドデータの利活用等) の適用に向けた議論が活発です。

言うまでもなく、臨床評価上の新たな課題の解決に計量生物学が寄与するためには「方法論の探究 (新規手法の考案や学習・適用) と実務 (データ解析の実践) のバランス」が重要です。米国の国際学会に参加していると、実務を進める上で気づいた統計的課題を的確に捉え、素早く新しい方法論の提案に結びつけた成果報告を目にします。特筆すべきは、産官学の様々な立場の統計家が新しい方法論の実適用に向けて議

論するだけでなく、新しい方法論の普及に向けて統計の非専門家とも議論する機会を設けている点です。

「バランス良く」をまさに体現している米国の現状に照らし、1人の統計家として自分を省みると、まだまだ改善の余地があります。目下の臨床試験では試験統計家としての責務を一定のスピード感を持って全うするよう常に心懸けていますが、日々の業務に追われる中にあるのは、前例が重視される論文査読や規制当局の評価を意識するあまり、既存のお作法的な方法論の踏襲を優先し、実務から見えてきた新たな統計的課題の探求を後回しにしている自分に気づきます。また、方法論の普及を目指し、産官学のステークホルダーと議論する機会も稀な状況です。計量生物学を通じた近未来の健康・医療への貢献の度合いは実務を効率よく捌くことを重視するスタンスでは必ず頭打ちになるはずです。本稿の「計量生物学の未来に向けて」というテーマについて考えたときに思い浮かんだのは、そ

んな自戒の念です。将来の自分に問い続けたいと思います。

- 新しい医療上のニーズに根ざした方法論の考案や適用に十分な労力を費やしているか？
- 新しい方法論の普及に向け、統計の非専門家を巻き込んで議論する機会を増やしているか？
- 同じ志を持った若手統計家を1人でも多く増やし、生物統計家が「バランス良く」仕事できる環境作りには貢献できているか？

以上に述べたことはまさに「言うは易く行うは難し」ではありますが、その活動を通してこそ、私に関わる機会の多い難治性疾患の予防・治療成績の向上に貢献できると考えています。不器用で歩幅の短い私ですが、どの山も歩み続ければいつかは頂に到達することを信じ、学会員の皆さまのご指導を賜りながら、日々泥臭く努力を重ねていく所存です。

9.2 生物（臨床）統計家へ育てていただいた者として思うこと

朝倉 こう子（国立循環器病研究センター）

この度「計量生物学の未来に向けて」というテーマで執筆の機会をいただき、自分に何が書けるだろうと考えました。現在私は生物（臨床）統計家として勤務させていただいていますが、修士課程までは薬学研究科に在籍し、無謀にも、統計的知識のまったくない状態で医学統計学の道を志しました。そんなゼロの段階から、統計家の実務を楽しんでいる段階まで育てていただいた者として、おもに「計量生物学の未来を担っていかれる若手統計家の方々に向けて」これまでに感じてきたことを書いてみようと思います。私は実務・研究の両活動において臨床試験のデザインや方法論にとくに関心があり、本稿も試験統計家寄りの内容になりますがご容赦ください。

私が所属する国立循環器病研究センター データサイエンス部は、医師主導で実施される治験や特定臨床研究などを支援する ARO (Academic Research Organization) の役割を担っており、その中で統計家として、臨床試験をはじめとするさまざまな臨床研究に携わらせていただいています。アカデミアの臨床試験関連業務に従事しいつも感じるのは、生物統計や臨床試験の教科書・講義では扱われない問題や疑問が日常的に生じることです。これらは実務担当者の立場では「問題が起こった」と感じますが、研究者の立場では「研究の題材が見つかった」瞬間でもあり、それが動機となって方法論の研究にとり組み、成果を現場

に還元・応用するといった、実務と研究の両立が理想的な姿であると感じています。今考えれば、臨床試験の業務を経験していない大学院生の頃は、研究している方法論の実際の臨床試験への適用可能性やその範囲を具体的にイメージしづらかったと思います。その一方で現場の試験統計家として実務に携われば、多くの試験を並行して担当するため、その傍ら自分自身の研究活動もこなすことを誰もが容易に行えるわけではありません。とはいえ多くの試験統計家が両立されており一番の要因は私の力不足ですが、バランスがとれず辛い時に思い出すのは、これまで交流をもった海外の統計家の姿です。大学や製薬企業のみならず規制当局や CRO (Contract Research Organization) に所属する統計家も、臨床試験の実務をこなしながら自身の研究活動にもとり組み、精力的に発表や発信を行っています。一つの機関に従事する統計家の人数が日本とは大きく異なり、実務と研究を両立しやすい環境が整っている、という点は大きく影響しているかと思いますが、では日本でもさらに人数を増やせば（実際には簡単に増やせない事情もあるかと思いますが）それでいいかといえ、おそらくそうではないでしょう。研究の素養をもった統計家が育つためには、たとえば、社会人としてまたはリサーチアシスタントなどで収入を得ながら学位を取得できる選択肢や、教科書・講義では扱われない問題の解決について議

論・助言いただけるシニア統計家（上司）や同僚の存在、他機関や海外の研究者と交流し自分に合ったキャリアパスをイメージできる機会、などの得られる環境も大事であろうと思います。そのような日本と海外に共通する点や異なる点（事情）について見聞きし、体感し、自分のキャリアパスについて考えることを若いうちにしておくことで、より柔軟な人生の選択ができるのではないかと思います。私の場合は（スタート時点ですでに若くなかったですが）、指導教官であった濱崎俊光先生が、各専門分野の第一人者である海外の研究者を定期的に招聘され、講義を聴いたりお話ししたりする機会を多く与えてくださったことで、上記のことを見聞きし視野を広げることができたと感じます。その中でも、多重比較における graphical approach や適応的デザインの研究で著名な Frank Bretz 博士率いる Novartis 社の Statistical Methodology & Consulting Group への訪問では、臨床試験に携わる研究者としての理想的な環境に感銘を受けました。彼らは Novartis 社における医薬品開発の各段階で生じる問題に対し試験統計家からのコンサルテーションを通じ支援を行いながら、方法論の研究に関しても自身の専門分野において第一人者であるという、素晴らしい研究者グループでした。一つの製薬企業が、20名以上の統計家から構成されるコンサルティンググループをもつことに驚いた記憶は今も鮮明に残

っています。ちなみに東京理科大学の寒水孝司先生が2010年（会報第104号）に本シリーズへ寄稿された際、15年後（2025年？）の希望的将来像として「コンサルティング専門の統計グループを有する製薬企業の数が増える」ことを挙げておられました。その15年後まであと3年ほどですが、現時点でいくつあるでしょうか。

このようなデスクに向かった研究活動のみではない、さまざまな機会をいただいたことへの感謝の気持ちとともに、これから育っていく方々にもそのような体験をしてほしいと感じます。それと同時に、偉そうなことを言いながら自分ではそのような機会づくりに貢献できていないことを情けなく思います。理想とする統計家像と自分とのギャップに落ち込むことは多いですが、そんな時でも上記のような経験や当時感じたことが、明日もがんばろうと思える原動力になっています。

最後になりましたが、本稿の執筆の機会をいただきましたことに心より御礼を申し上げますとともに、計量生物学の未来を担っていかれる方々が日々の原動力となるような経験をたくさん積み重ね、その方々のご活躍により日本の計量生物学が今後ますます発展していくことを祈念いたします。そして私自身も、何らかの形で少しでもその発展に寄与できるよう、これからも精進してまいります。

10. 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い

本学会雑誌である「計量生物学」に会員からの積極的な投稿を期待しています。会員のためになる、会員相互間の研究交流をより一層促進するための雑誌をめざすため、以下の5種類の投稿原稿が設けてあります。

1. 原著 (Original Article)

計量生物学分野における諸問題を扱う上で創意工夫をこらし、理論上もしくは応用上価値ある内容を含むもの。

2. 総説 (Review)

あるテーマについて過去から最近までの研究状況を解説し、その現状、将来への課題、展望についてまとめたもの。

3. 研究速報 (Preliminary Report)

原著ほどまとまっていないがノートとして書き留め、新機軸の潜在的な可能性を宣言するもの。

4. コンサルタント・フォーラム (Consultant's Forum)

服部 聡, 五所 正彦 (編集担当理事)

会員が現実に直面している具体的問題の解決法などに関する質問。編集委員会はこれを受けて、適切な回答例を提示、または討論を行う。なお、質問者（著者）名は掲載時には匿名も可とする。

5. 読者の声 (Letter to the Editor)

雑誌に掲載された記事などに関する質問、反論、意見。

論文投稿となると、「オリジナリティーが要求される」、「日常業務での統計ユーザーにとっては敷居が高い」などを理由に二の足を踏む会員が多いかもしれませんが、上記の「研究速報」、「コンサルタント・フォーラム」は、そのような会員のために設けられた場であり、活発に利用されることを特に期待しています。いずれの投稿論文も和文・英文のどちらでも構いません。

2004年度から学会に3つの賞が設けられ、その一つである奨励賞は、「日本計量生物学会誌、Biometrics, JABES」に掲載された論文の著者（単著

でなくても第1著者かそれに準ずる者)で原則として40歳未満の本学会の正会員または学生会員を対象に、毎年1名以上に与えられる賞」です。最近、履歴書の賞罰欄に「なし」と書くことと公募の際に引け目を感じるくらいです。ここ数年、「計量生物学」に掲載された論文が受賞しており、今後もこの傾向は続くものと見込まれます。特に、上記の条件を満たす方は、ご自身の研究成果の投稿先として「計量生物学」を積極的に検討されてはいかがでしょうか。

また、特に最近の計量生物学の研究に関しては、英語の総説はあっても、日本語で書かれたよい総

説・解説が存在しない分野やテーマが多く見受けられます。日本語での総説論文は、多くの会員に有益な情報を提供すると同時に大変貴重なものになりますので、その投稿は大いに歓迎されます。これまで著者から論文掲載料をいただいていたが、学会員が筆頭著者の場合は無料とすることになりました。2013年発行の34巻1号からこれを適用しています。

なお、論文の投稿に際しては、論文の種類を問わず、雑誌「計量生物学」に記載されている投稿規程をご参照ください。会員諸氏の意欲的な論文投稿を心よりお待ちしております。

11. 2023年度 日本計量生物学会賞および功労賞候補者推薦のお願い

大森 崇, 松山 裕 (学会賞担当理事)

一般社団法人日本計量生物学会は、日本計量生物学会賞、功労賞および奨励賞の3つの賞を授与しています。この中で、日本計量生物学会賞と功労賞の受賞候補者は、会員の皆様により推薦いただき学会賞選定委員会にて受賞者を推薦し、日本計量生物学会賞受賞者は理事会の承認により、また功労賞受賞者は理事会での協議のうえ社員総会の承認により決定されます。

今年度も、会員の皆様に日本計量生物学会賞および功労賞の推薦をお願いする時期となりました。自薦、他薦いずれも受け付けますので、宜しくご推薦お願い申し上げます。

日本計量生物学会賞および功労賞の対象者は以下の通りです。

日本計量生物学会賞：顕著な研究成果を発表した学会員に対する賞

功労賞：本学会への貢献が大きかった学会員に対する賞

下記の様式により日本計量生物学会賞、功労賞いずれも学会賞選定委員会宛、あるいは学会賞担当

理事に郵送または電子メールにてお送りください。受賞者の発表と表彰は4月の会員総会で行います。いずれの賞もニュースレターなどで受賞理由を公表いたします(推薦者は非公表です)。

推薦書の様式：A4版1枚に、日本計量生物学会賞または功労賞推薦書と14ポイントで書き、本文は10.5ポイントで以下の内容をご記入下さい。資料の添付等は自由です。

- 1) 被推薦者氏名、所属、連絡先(住所、電話、e-mail)
- 2) 推薦理由(略歴含む)
- 3) 推薦期日
- 4) 推薦者氏名(複数の場合は全員)
- 5) 推薦者(複数の場合は代表者)の所属および連絡先(住所、電話、e-mail)

推薦締め切り期日：2023年1月31日(必着)

推薦書送付先：〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5階

(財)統計情報研究開発センター内

一般社団法人 日本計量生物学会事務局 学会賞選定委員会

12. 編集後記

学会の2023-24年度の体制が決まってきました。会報の次期評議員(社員)予定者による懇談会議事録もご覧ください。新理事会への移行時期は、定款・法律に合わせるため、次年度からは3月の社員総会になります。この機会に会報の発行時期も4, 8, 12月に移動する予定です。評議員(社員)の任期は従来通り1月からです。

IBC2022が7月にラトビアのRigaで現地開催

されました。コロナ禍や国際状況から、参加を見合わせた方もいたのではないかと思います。日本からも何人か参加されています。写真を送っていただきました。

今回のIBC2024はアルゼンチンのブエノスアイレスで2024年12月上旬に開催予定です(<https://www.biometricsociety.org/meetings>)。そして、IBC2026は韓国のソウルで開催予定です。

IBC2020 はソウルで開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の流行のためバーチャル開催でした。

国際計量生物学会（International Biometric Society）の2024-25年の会長はドイツの Iris Pigeot 氏です。現在、国際計量生物学会 Executive Board の新メンバーの選挙中です(12月9日締め切り)。

本年度功労賞を受賞されました、丹後俊郎元会長が瑞宝小綬章を受章されました。心よりお祝い申し上げます。

コロナ禍も3年目となり、第8波が始まっています。死亡者数だけでなく、その年齢分布も各国で異なることに、胸をつかれます。

(彩の国より)



31st International Biometric Conference (IBC2022)
2022年7月 Latvia Riga
Opening Session



75th Anniversary Gala Dinner
左から、島津秀康氏（Loughborough University）、
松浦健太郎氏（東京理科大学大学院/中外製薬）、
服部聡氏（大阪大学大学院）、寒水孝司氏（東京理
科大学）、橋詰公一氏（東京理科大学大学院/ブリ
ストル・マイヤーズ スクイブ）

日本計量生物学会会報第 140 号
2022 年 12 月 2 日発行

発行者: 日本計量生物学会
発行責任者: 松井茂之 編集者: 船渡川伊久子, 大庭幸治